

[書 評]

ドミニック・ルジュンヌ著
『ベル・エポックのフランス』

鈴木正昭

ドミニック・ルジュンヌ著

『ベル・エポックのフランス 1896年—1914年』

(アルマン・コラン社, 1995年3月刊)

表題からも明らかなように、本書は19世紀末から20世紀始めにかけてのフランス社会を対象とした歴史書である。著者のフィリップ・ルジュンヌ氏は文学及び人間科学の博士号を持ち、現在多くの有名人を輩出したことで名高い、リセ・ルイ・ルグランの補習クラスで歴史学を担当している。

ベル・エポックという言葉がいつからいつまでを指すかについては諸説があるが、いずれにしても普仏戦争の終了から第一次世界大戦の開戦までの間という点には例外がないようである。本書では1896年から1914年までがベル・エポックとして扱われている。筆者の記憶する限りでは最も短い区切り方である。最も長い区切り方を採用した場合には四十数年という、わが国でいえばほぼ明治時代の全期間や第二次大戦の終了から昭和天皇の崩御にいたる期間に匹敵する。

期間については定説はないといってもいい状態であるが、ベル・エポックという言葉の起源は明らかにされている。この語の初出は、第一次世界大戦が連合国の勝利に終わりヴェルサイユ条約が締結された1919年である。

およそ900万人という未曾有の死有を出した大戦はヨーロッパ諸国の人々に大きな後遺症を残した。その結果の一つは平和を維持するための組織に対する要請を生み、国際連盟という形を取って実現された。また同時に戦争前の平和で豊かな時代にたいする哀惜の念が高まった。そしてまた、その点においてはフランスも例外ではなかったのである。ベル・エポックとは麗しい時代の謂いである。この言葉は用いられるとともにたちまちのうちに多くの人々に使用されるようになった。実際に戦前がそれほどけっこうな時代であったかは議論のあるところであるが、こうした言葉を使用せずにはいられないほど、戦争から受けた衝撃は大きく、戦争で失ったものが多かったと

ということなのであろう。

今年（1996年）は本書の著者が採用したベル・エポックの開始の年から100年目にあたる。ベル・エポックの時代は自動車、飛行機、映画をはじめ今日でも世界の産業の中で重要な地位を占める産業の黎明期だった。日本では昨年は阪神大震災、オウム真理教事件がテレビ、新聞を賑わした。そのために霞んでしまったきらいはあるが、時々1995年がリュミエール兄弟による映画の発明から100周年であることと、その関連の報道が行われたこともまだ記憶に新しいところである。

ベル・エポックの初期、フランス社会はドレフュス事件をめぐって大揺れに揺れた。ドレフュス大尉がスパイ容疑で逮捕されたのは1894年のことであるが、この事件は97年頃から一般社会の関心を集めるようになり、翌98年には自然主義作家エミール・ゾラの「我弾劾す」が発表されたり、それまで芸術至上主義の作家と目されていたアナトール・フランスがドレフュス擁護に立ち上がったことでもあまりにも有名である。そして99年にはドレフュスに共和国大統領による特赦が与えられ、この事件はいちおうの決着をみた。

ドレフュス事件はフランス社会を二分し、右翼、左翼の対立関係をそれまで以上に先鋭化した。本書ではこの事件の顛末に大きなスペースが割かれている。本書には所々に囲み記事が設けられてエピソードや、やや詳細な説明にあてられているが、それによればドレフュスは名誉を回復された後1907年に兵役を引退した。翌1908年には彼を擁護したゾラをパンテオンにまつ儀式の終了後襲撃され負傷した。1914年に始まった大戦には一兵士として従軍した。彼は1935年まで生き、事件の主要関係者の中で最も長命を保った。1859年生まれだったから享年76歳だった。当時としては長命の部類にはいるであろう。

ドレフュスが名誉を回復し事件が一応の決着をみた翌年（1900年）にはパリで万国博が開催された。19世紀最後の年を飾る大きな出来事だった。この万国博という行事は明治以降の日本でも度々開催され、多くの人々を集め

るのに格好の形態であることは周知のごとくである。1970年のそれは高度経済成長のさなかに開催され、空前絶後と言っていいほどの入場者を集めたことは記憶に新しい。科学万博、花と緑の博覧会もそれぞれそれなりの入場者を集めた。また昨年の東京都知事選が都市博覧会をその争点の一つにしていたこともまだすべての人が覚えていよう。

博覧会もまた他の多くのもの同様、19世紀のヨーロッパの発明品の一つだったのである。おびただしい数の博覧会が開催されたが、その中でも1851年のロンドンの万博は有名である。パリの1900年のそれも有名で、例えばロンドンに留学した夏目漱石もフランス経由でパリの万博見物をすませた後にロンドン入りしている。しかしパリの万博は実はこの時が最初だったわけではなかった。実に1855年、67年、78年、89年とそれまでに4回も万博を経験し、従って、この度のそれはこの都市が経験する5回目の万博なのであった。この度の万博はドイツが普仏戦争後初めて参加したフランス国内での万博だった。4800万人もの入場者を数えたのだが、この数は1878年のその3倍にあたるのだそうである。また当時高級品だったカメラを持参した入場者が実に全体の6分の1にのぼったと言われる。また何か所かに分かれた会場の総面積は100ヘクタールという広大なものであった。

1900年の万国博は現在のパリにも多くの痕跡を残しており、そのおかげで我々はその盛大さの一端を今日でも想起することができる。例えば、グラン・パレ、プチ・パレ、オルセー駅（今日では美術館として再利用されていることは言うまでもない）等の壮麗な建造物などがそれである。また程近くでセーヌ川をまたいでいるアレクサンドル三世橋もそうである。これらはもちろん今日も利用されているけれども、パリ市民が最も多くの恩恵を被っている万博の遺産はこれらの建造物にも増してパリの地下鉄かもしれない。ポルト・マイヨとポルト・ド・バンセンヌ間を結ぶ地下鉄が開通したのは1900年7月19日のことだった。これは欧米先進国の中ではけっして早いほうではなく、むしろ遅いほうである。ロンドンの地下鉄はそれよりも37年も早く1863年のことだった。地下鉄はそれ以後ニューヨーク(1868年)、シカゴ(1892

年)、ブタベスト(1896年)という具合に敷設されていった。ちなみにわが国に最初の地下鉄が敷設されたのは1927年(昭和2年)上野―浅草間であったことは多くの人々が知っているだろう。

パリの地下鉄の敷設が他の欧米諸都市に後れをとったのは技術的、財政的な原因によるものではなかった。主たる原因は中央政府とパリ市当局との反目にあった。すなわち、中央政府はわが国の山手線や大阪の環状線のように、パリ市内に散在する国鉄の駅の間を連絡するための鉄道の敷設を希望したのに対して、パリ市側は国鉄とは無関係にパリ市民の便宜を中心に据えた地下鉄を強く主張したからである。この争いは結局パリ市の勝利に終わった。パリを旅行したことがある人であれば、北駅、東駅、リヨン駅、モンパルナス駅等の間に鉄道による連絡がなく、不自由な思いを味わった経験があるかもしれない。少なくとも筆者の場合はそうだった。なぜ東京や大阪のように国鉄駅が環状線で結ばれていないのか、いぶかしく思ったことを思い出す。中央政府は間近に迫った万国博のために結局パリ市に譲歩せざるを得なかったのである。工事を依頼されたフルジャンス・ピアンブニュは20カ月でこの工事を完成させ、今日も「地下鉄の父」と呼ばれている。地下鉄の運営は当初「地下鉄道会社」によって行われ、後パリ市交通局に買収・編入された。

時の共和国大統領レーベは万博を祝して「20世紀にはより多くの友情がより少ない悲慘のうえに輝くであろうことを確信します」と述べた。19世紀最後の年に発せられた祈りの言葉は、あと数年で20世紀も終わろうとしている現在実現されたと言えるであろうか。また「21世紀にはより多くの友情がより少ない悲慘のうえに輝くであろうことを確信します」と我々は言い切れるであろうか。

ドレフュス事件と万国博という明暗二つの大きな出来事によって幕を開けたフランスのベル・エポックであるが、この時代の歴史は日本の同時代との共通性がきわめて高く、このころより世界は交通機関の発達により物理的な距離が有名無実化していったばかりでなく、精神的にも同じ思想を生きるようになっていったことがわかる。それを可能にしていったのはもちろん新

聞・雑誌等を中心とするジャーナリズムの発達だった。ラジオ、テレビの実用化までにはまだ多くの時間が必要だったが、新聞・雑誌というメディアの発達と普及が国民の知的な地平を広げたことは確かである。そしてそれを可能ならしめたのは教育の普及である。当然のことながら識字率の上昇と新聞・雑誌の発行部数の増加との間には密接な関係があるからである。

この時代のフランスの教育の進展状況を見ると、カトリックの国ゆえの公教育における宗教の扱いが大きな問題だったことが理解できる。このあたりの事情は教育と宗教の関わりの少ないわが国とは大いに異なるところである。1904年の法律により、修道会は公立学校との関わりを断たれることになった。だがこのことは私立の学校が存続できなかったことをただちに意味するものではなかった。とりわけ女子教育においては、私立学校がかなり大きな影響力を持っていたことは意外と知られていないのではないだろうか。本書に挙げられている1912年から13年にかけての公立・私立それぞれの学校の在籍者数によれば公立に通学する女子生徒230万人に対し、私立に通う女子生徒が70万人もいたことがわかる。そして公立学校に通う生徒たちが学外で宗教教育を受けることができるよう木曜日は休日とされたのである。またこの時代に幼稚園がつくられ、女子のための中等教育機関もつくられたのだった。

制度が存在するからといって、それが効果的に運用されているとはただちに言えないのはもちろんである。いずれの国でも義務教育制度の導入後しばらくはその意義が十分に理解されず、国民の協力が得られないことがしばしばある。フランスもその例外ではなく、この時期になっても多くの義務教育の現場は多くの長期欠席者の存在に悩まされなければならなかった。

高等教育ではエコル・ノルマル・シュペリユールの位置が現在とは比較にならないほど特権的な地位を誇っていたようである。またその入学試験のための準備クラスは有名ないくつかのリセに設置され、全国からの秀才を集めたことはあまりにも有名である。そしてこの制度は今日も存続しており、現に本書の著者ドミニク・ルジュンヌ氏もこうした準備クラスで歴史学を教

授しているのである。なかでも文科系の補習クラスはカーニユと呼ばれ、最も選び抜かれた学生が集まると言われた。

こうした教育の普及によりジャーナリズムの発展が可能になったのは先ほど見たとおりであるが、他にも印刷技術の向上によってもたらされた新聞一部あたりの価格の低下と（その結果当然ながら新聞のページ数も増加した）、鉄道の普及による新聞運搬の迅速化が新聞の普及のために不可欠であったことに著者は注意を喚起している。第一次大戦が始まった1914年にはパリだけでも70にのぼる日刊紙が存在したと言われる。ただしそれらの総発行部数の4分の3は4大紙によって占められていた。そしてこれら大新聞はそれぞれ100万を超える部数を誇っていた。

この時期の思想界の大立者はアンリ・ベルクソンだった。『物質と記憶』が1896年に、『創造的進化』が1907年に刊行された。文学の世界ではゾラがその活動の最終時期を迎えていた。『ルーゴン・マッカール叢書』を1893年に、『三都市』を94年から97年にかけて完成した。その後しばらくはドレフュス事件により執筆を中断していたが、最後の作品『四福音書』の完成を見ることなく1902年に死去した。彼に先立ち、エドモン・ゴンクール(1896年)、アルフォンス・ドーデ(1897年)もベル・エポックの初期に亡くなっている。シャルル・ルイ・フィリップやジュール・ルナールらはこの時期にその活動期を迎えていた。さらにアナトール・フランスやピエール・ロチらの活躍も忘れることはできない。またこの時期には女流作家も数多く登場するようになった。アンナ・ド・ノアージュの名前は今日でも記憶されているし、コレットもまたこの時期に長い創作活動のスタートを切った。

詩歌の世界では高踏派はすでにその役割を終え、象徴主義の詩人たちもその最盛期を過ぎていた。旺盛に作品を発表していたのはアルベール・サマンやベルギー人メーテルリンクらだった。戯曲の分野でも多くの作家が登場したけれども、今日でも人々の記憶に残るのはポール・クロードとエドモン・ロスタン（『シラノ・ド・ベルジュラク』の作者）である。

絵画の世界では印象派の画家たちの多くがすでに世を去ったり、第一線を

退いたりしていた。ヴァン・ゴッホは 1890 年に世を去っていたが、まだ理解されざる呪われた画家だった。ゴッホの死の翌年からタヒチに移り住んだゴーギャンが再びフランスに戻り、死んだのは 1903 年のことで、彼の後半の活動はほぼベル・エポックの時期と重なっている。またボナール、ピュイヤールらのナビ派の画家たち、税関吏のルソー、ベル・エポックといえはまず思い出す人も多いのではないかと思われるロートレック、また 20 世紀絵画の巨匠たちに大きな影響を及ぼしたセザンヌと並べてくると、印象派後もフランスの美術がいかに大きなエネルギーを持続させていたかが窺われるのである。ベル・エポックの後半にはキュビズムの画家たちもすでにその活動を開始していた。その他 1905 年のサロン・ドートヌで人々を驚倒させたフォービズムの画家たち、ドラク、デュフィ、マチス、バン・ドンゲン、ブラマンクと並べてみると、この時期のフランスの信じられないほどの豊穡さが理解されよう。この時期の彫刻家としてはロダン、ブールデル、マイヨールの名を挙げるだけで十分であろう。さらに人によってはこの時期の美術といえは何よりもまずアール・ヌボーを思い浮かべる人も多いことだろう。エクトル・ギマルやアルフォンス・ミュシャが名高い。スペイン人ガウディは彼ら以上に有名である。彼らの対象は建築、家具、絵画とありとあらゆるジャンルにわたった。

音楽の分野でもこのベル・エポックの時代は豊かな遺産を残している。フォーレ、ドビュッシー、ラベルと並べてみれば、ラモーやクーランの活躍したルイ王朝時代と並ぶフランス音楽の黄金時代といっても過言ではないであろう。

このベル・エポックの時代に起こった大きな変化の一つにスポーツの隆盛がある。今年の夏はアトランタで夏のオリンピック競技が開催され、そのための代表選考が日々のニュースでも大きな話題になっているけれども、そのオリンピックの唱道者がフランス人のクーベルタン男爵だったことは子供でも承知している常識である。近代オリンピックの開催はベル・エポックの 1896 年のことだった。もっともこの第 1 回の大会は、古代のオリンピック

開催地ギリシャに敬意を表してアテネで開催されたこともまた今日の大方の人の常識に属するであろう。

またスポーツの隆盛は 90 年代に始まったものであるが、とりわけ 20 世紀に入ってから加速度的に上昇した。スポーツ団体の数は 1907 年には 1902 年の 2 倍に増加し、1913 年には 1907 年の 3 倍にもなった。それは伝統的なスポーツ（九柱戯など）ばかりでなく、自転車、射撃、水泳、球技に至るまで多彩をきわめた。またこの時代にはそれまで体を動かすことの少なかった女性たちまでもがスポーツの世界に登場した。彼女たちが比較的多く取り組んだのは水泳とテニスだった。

見せものとしてのスポーツも事実上この時代に始まったと言えるだろう。ツール・ド・フランスといえば、今日でもフランスでは他のスポーツを圧倒して国民の熱狂的な支持を受けているスポーツであるが、その第 1 回は 1907 年のことである。日本でもツール・ド・北海道などという大会が開催されているほど、今日では単にフランスのみのスポーツを越えて国際的なスポーツになりかかっていると言える。またフランスは現在もパリ・ダカールの耐久自動車レースの開催地として名高いが、こうしたカー・レースもまたこの時代にその起源を持っているのである。1903 年のレースはパリ・マドリッド間で争われる予定であったが、事故の多発によりボルドーで打ち切られた。もっとも人々はそれにめげることなく、1907 年にはパリ・北京間のレースまで開催されたのである。

スポーツに対しては文部省、軍をはじめ国家的な奨励や、財政上の補助が与えられた。こうしたところから本書の著者は、この時期のスポーツの隆盛を当時の政治状況や思想界の動向と関連づけているように見受けられる。確かに 20 世紀にはいるとビスマルク時代のそれなりの安定が少しずつ崩壊に向かい始め、国際関係の先行きが不透明になってきたことは否定できない。とりわけモロッコをめぐるドイツとの対立は国民のドイツに対する警戒感、敵愾心をいやがうえにも高めたであろう。またそうした国際情勢やドレフス事件に対する政府の取り組みに不満を持つ階層の支持を受けて、この時期

大きな勢力をふるったアクション・フランセーズの影響もあった。さらに著者はこうした背景と、誤解されたベルクソンの哲学とがこうした傾向をさらに助長した、と考えているようである。帝国主義の時代が要請する強い兵士を養成すべくスポーツを奨励する、というのは確かにそれなりの説得力はあるけれども、それだけでスポーツの隆盛を説明するには不十分ではないだろうか。スポーツの隆盛を準備した社会情勢がすっかり変化してしまった今日でも、スポーツは衰えるどころかますます隆盛を誇っているからである。

このベル・エポックの時代は日本の年号で言えば明治 29 年から大正 3 年にあたる。つまりは明治維新から 30 年近くを経ていちおうの近代化、すなわち富国強兵が実現し、その結果朝鮮問題をめぐって争った中国（清）との戦争に勝利をおさめることができたのが、つい 2, 3 年前のことだった。下関条約によって得た権益の一部を三国干渉によって返還を余儀なくされるなど、アジアの新興国日本は大きな試練にさらされた。まさしく一難去ってまた一難だった。孤立した日本が同じく孤立に悩む英国と手を携えたのが日英同盟であることは言うまでもないが、20 世紀の初頭、日本はそれ以上の試練にさらされることになった。すなわち日露戦争である。

東洋の小国が近代化を推し進めながら日清・日露の戦争を戦っていた頃、ヨーロッパではまだ平穏が支配的だった。1870 年の普仏戦争以後平和が 30 年近く続いていた。大英帝国ではビクトリア女王の治世が終わりを告げようとしていた。ドイツでは鉄血宰相ビスマルクが 1890 年にその地位を去っていた。彼の後任者は彼の外交方針に変更を加え、徐々にヨーロッパにも緊張状態は高まっていくものの、第一次大戦までにはまだ 20 年前後の平和な時代が続いたのである。

ドレフュス事件、万国博という大きな出来事の後、大戦に至るフランス国内の政治のありさまを簡単に見ておくことにしよう。実はベル・エポックという一時期をその対象とする本書の記述は政治を中心に据えてなされているのである。文化、社会についての紹介に多くのスペースを割いたのは、本稿の筆者が 19 世紀から 20 世紀にかけての文学研究を専門にしているため、

政治史についての記述の評価に十分な確信が持てないからなのである。

ドレフュス事件当時、フランスの政権をとっていたのは穏健共和派とカトリックや保守派との連立政権だった。このメリーヌ内閣の崩壊後、穏健共和派を除外した内閣が成立し、政権の枠組みは一変してしまったのだった。ここで急進派はヴァルデック＝ルソー内閣の政権与党となったのである。そして1902年の総選挙後には急進派のコンブが首相に任命された。この内閣の政策の中で大きな影響を社会に与えたのは修道会の教育界からの締め出しである。そして1905年には政教分離法が成立した。これは国家がいかなる宗教も公認せず、かつまた補助金を一切支給しないことを定めた法律である。同年、統一社会党が結成された。その間、フランスの外交はモロッコをめぐるドイツとの間が陰悪化しつつあった。フランスは1900年12月にイタリアに対しモロッコでの植民地開設を承認させる秘密条約を締結した。それと平行してフランスの実業界のモロッコへの投資は大幅に増大していった。1904年には英国にエジプトでの優先権を認めるのと引き替えに、モロッコにおけるフランスの優先権を英国に認めさせることを取り決めた英仏協商が結ばれた。急進派が結んだこうした条約は穏健派をも大いに満足させるもので、その違いは軍事的な侵出を認めるかどうかの相違にすぎなかったのである。モロッコへの平和的侵出は社会党の指導者ジャン・ジョレスまでもが認めていたのであるから、フランス国内にはモロッコ侵出に対する反対勢力はほとんど影を潜めてしまったと言っても過言ではなかった。

1905年3月、ドイツ皇帝ヴィルヘルム2世はモロッコのタンジールを訪れ、モロッコにおけるドイツの権益を主張した。これは当時進行中だった日露戦争におけるフランスの同盟国ロシアの敗戦を見越しての行動であったことは明らかだった。フランスは一国でドイツと戦うだけの軍事力を欠いていたため、対独強硬策を主張する外相デルカッセを罷免せざるを得なかった。モロッコ問題を討議する会議がアルヘシラスで開催された。この会議でフランスは英米両国の支持を取り付けて、モロッコにおける優先的な地位が保証された。しかし、これがドイツのフランスに対する敵意をますます強めたこ

とは当然だった。もちろんフランス国内の反独感情も高まるばかりだった。

1906年には内閣が同じ急進派のクレマンソーに代わった。国内では労働総同盟（CGT）を中心に激しい労働運動を繰り広げ、政府と激しく対決した。これに対し政府も激しい弾圧を加え、多くの労働者が射殺された。これにより急進派とジャン・ジョレスも激しく対立するに至った。

1907年にはいと、モロッコでは現地住民のフランス人に対する抵抗運動が活発になっていった。フランス政府は秩序維持を目的に数次にわたり軍を派遣するが、徐々に軍事力によるモロッコ征服の様相を呈するようになっていった。これに異を唱える者はもはやジャン・ジョレスを中心にする社会主義者だけだった。このモロッコの蜂起は1907年の初頭にはいちおうの平穩を回復した。同年7月、ブリアンを首班とする内閣が組織された。彼もまたかつての政教分離法を起草した当時の彼ではなかった。クレマンソー同様、彼もまた労働者に対しては厳しく取り締まることをためらわなかった。1911年になるとモロッコでは再び反仏民族蜂起が起こった。4月にはフランス軍がモロッコ的首都フェズに派遣された。失地回復を狙っていたドイツはこの好機を見逃すことなく軍をアガディールに派遣し、モロッコを放棄する代わりに仏領コンゴの割譲を要求した。いちおうの決着をみたものの、フランス国内にはますますショービニズムの運動が猖獗^{しょうけつ}を極めるようになった。

1912年、ポアンカレが組閣した。彼はその翌年には大統領に選出された。バルカンが騒々しくなってきた。1905年に2年になった兵役が3年へと再び延長されたのは1913年7月である。これはフランスの人口がドイツに比して相当少ないため、同等の兵力を保つために兵役期間を以前と同じく3年に戻すことが主張されたのである。大戦前年の1913年当時でフランスの人口は3900万人、対するドイツは6500万人であった。ドイツに対する敵対意識と愛国ムードの中で、こうした措置に反対する勢力は減少の一途をたどっていったのだが、ジャン・ジョレスはこの兵役の義務年限の延長にも激しく反対した。兵役の延長に伴う予算の増大に備えるべく租税制度の近代化

がはかられた。これはすったもんだのあげく、大戦直前の1914年6月によくヴィヴィアーニ内閣によって実現された。

こうして進む戦争への歩みに対して、もちろんまったく反対がなかったわけではない。しかし政府による度重なる弾圧の中で、戦争に反対する動きは息の根を止められていった。だからといって戦争を望む人がフランス国内の大勢だったわけではない。政府に対する反対に対しては弾圧が加えられたが、首脳部がドイツと戦うことを望んだわけではないし、財界の大部分も平和の維持を支持していた。戦争の危険は感じてはいたものの、フランス人が開戦を覚悟したのはそれ以前に2度あったモロッコ事件の際であった。

ドイツに対する敵対感情、国粹主義の高まりはあったものの、多くの国民は戦争を望んでいたわけではなかったし、モロッコ事件も何とか切り抜けて戦争を回避することができた、というのが多くのフランス人の大戦前夜の判断だった。サラエボの銃声がみぞうの大戦の開始を告げた直後、フランス国内では最後まで平和を求めたジャン・ジョレスが暗殺された。この銃声はフランス国民にとっては青天の霹靂だった。こうして1914年8月、独仏間に戦闘が開始されたのだが、それは同時にベル・エポックの終わりを告げる合図でもあった。

本書は書名どおりフランスの国内のある一時期を記述したもので、近隣のヨーロッパ諸国に関しては必要最小限の言及がなされているにすぎない。まして東洋の一隅で近代国家としてそろそろ帝国主義諸国の仲間入りをしかけていたわが国に関してはほとんど言及されていない。この時代は今日我々の身のまわりを取りまいているものの多くが登場した時代である。飛行機、自動車などの交通機関の発達、またフランス人ではなかったがイタリア人マルコーニの無線電信の発明等により世界が一体化を始めた時代なのであるが、本書はあくまでもこの時期のフランスにその記述を限定し、外交問題では相手国についてごく簡単に触れているだけである。

本書はベル・エポックというわずか20年足らずの短期間のフランス史を対象とした研究書であり、政治、経済、社会、文化すべての面からこの時代

が考察されているものの、その中心を占めているのは社会史、文化史であるよりも、この時代の政治をめぐる考察である。筆者の専門に近い文学、芸術部門に関する記述はいささか簡単に扱われているという不満が残る。具体的な作品について触れられることがほとんどないの言うまでもないことだが、すべての部門の概観ともなればやむを得ないことなのであろう。それをいくぶんなりとも救っているのが20カ所近い囲み記事である。有名なクセジュ文庫などではあまりにも少ないスペースにあまりにも多くの内容を入れようとして、表現があまりにも圧縮されすぎて無味乾燥そのものという場合も少なくないのであるが、本書の場合はもう少しスペースに余裕があるため、部門によってはいくぶん不満を覚えるところなきとしないが、極端な読みにくさを免れている。それどころかフランス語の文章自体は比較的読みやすい部類に属する。ベル・エポックというちょうど現在から一世紀前の時代に興味や関心を抱く人にとって本書は適当な入門書である。世紀末を迎え、前回の世紀末に対して関心を持つ人も少なからず存在すると思われるが、そうした人にとってこの時代を概観するにはまことに便利な本であると思う。個々の分野についての詳細な説明を本書に求めるのではないものねだりというべきであろう。

なお本稿完成間近の3月末に鹿島茂氏の『パリ・世紀末パノラマ館』が刊行された。鹿島氏の著書の扱う時代は正確に言えば本書の対象とする時期と多少ずれているのだが、かなりの部分が重なっている。鹿島氏は現在共立女子大学勤務で19世紀フランスの小説を専攻される気鋭の研究者である。『馬車を買いたい!』で1991年度サントリー学芸賞を受賞されたほか、『デパートを発明した男』、『絶景、パリ万国博覧会』、『新聞王伝説』等の著書がある。ドミニック・ルジュンヌ氏の著書が活字だけをぎっしり詰め込んだ書物でいささか殺風景なのに対し、鹿島氏の著作は多くの写真や図版が含まれ、活字の組み方にも余裕があり、きわめて興味深い読み物になっている。本書と併せて読めば、ベル・エポックの時代についての理解に広さと深さが与えられると思う。